

平成二十五年 度 入 学 試 験 問 題 (一 次)

国 語

(時間 五十分)

(注意事項)

- 一 試験開始の合図まで開けてはいけません。
- 二 受験番号・氏名を解答用紙に記入しなさい。
- 三 試験問題は五題あります。問題がぬけていたり、印刷がはっきりしない場合は申し出なさい。
- 四 解答は解答用紙に記入しなさい。
- 五 解答用紙だけを提出しなさい。

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 引責処分を受ける。
- 2 傷心をなぐさめる。
- 3 それは机上の空論です。
- 4 好評を博す。
- 5 ご飯を蒸らす。

次の——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 ケンアクなムードになる。
- 2 全員にフンキをうながす。
- 3 葉のコウノウを調べる。
- 4 くやしい思いを胸にヒめる。
- 5 柿の実がウれる。

「お葬式だわ」

と、ヒロ子さんがいった。彼は、口をとがらせて答えた。

「へんなの。東京じゃあんなことしないよ」

「でも、こつちじゃああるのよ」ヒロ子さんは、姉さんぶっておしえた。「そしてね。子供が行くと、お饅頭をくれるの。お母さんがそういったわ」

「お饅頭？ ほんとうのアンコなの？」

「そうよ。ものすごく甘いもの。そして、とっても大きくって、赤ちやんの頭ぐらいあるんだって」

彼は唾をのんだ。

「ね。……ほくらにも、くれると思う？」

「そうね」ヒロ子さんは、**B**。「くれる、かもしれない」

「ほんと？」

「行ってみようか？ じゃあ」

「よし」と彼は叫んだ。「競走だよ！」

芋畑は、真青な波を重ねた海みたいだった。彼はその中におどろこんだ。近道をしてやるつもりだった。……ヒロ子さんは、畦道を大まわりしている。ほくのほうが早いにきまっている、もし早い者順でヒロ子さんの分がなくなっちゃったら、半分わけてやってもいい。芋のつるが足にからむやわらかい緑の海のなかを、彼は、手を振りまわしながら夢中で駆けつづけた。

正面の丘のかけから、大きな石が飛び出したような気がしたのはその途中でだった。石はこちらを向き、急速な爆音といっしょに、不意

三

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点等は一字として数えないこと。)

主人公は戦争末期の疎開児童として三ヶ月ほど住んでいた海岸の小さな町の駅に下りた。

駅前の風景はすっかり変わっていた。夏の真昼、芋畑の向こうに小さな葬列を見た。一瞬十数年の歳月が消えて、自分がふたたびあの時の中にいる錯覚におちいった。

濃緑の葉を重ねた一面のひろい芋畑の向こうに、一列になった小さな人かげが動いていた。線路わきの道に立って、彼は、真白なワンピースを着た同じ疎開児童のヒロ子さんと、ならんでそれを見ていた。この海岸の町の小学校(当時は国民学校といったが)では、東京から来た子供は、彼とヒロ子さんの二人きりだった。二年上級の五年生で、勉強もよくでき大柄なヒロ子さんは、いつも彼をかばってくれ、弱むしの彼をはなれなかった。

よく晴れた昼ちかくで、その日も、二人きりで海岸であそんできた帰りだった。

行列は、ひどく**A**していた。先頭の人は、大昔の人のような白い着物に黒っぽい長い帽子をかぶり、顔のまえでなにかを振りながら歩いている。つづいて、竹筒のようなものをもった若い男。そして、四角く細長い箱をかついだ四人の男たちと、その横をうつむいたまま歩いてくる黒い和服の女。……

に、なにかを引きはがすような烈しい連続音がきこえた。叫びこえがあがった。「**\***ガンサイキだあ」と、その声はどなった。

艦載機だ。彼は恐怖に喉がつまり、とたんに芋畑の中に倒れこんだ。炸裂音が空中にすさまじい響きを立てて頭上を過ぎ、女の泣きわめく声がきこえた。ヒロ子さんじゃない、と彼は思った。あれは、もつと大人の女のひとの声だ。

「二機だ、かくれろ！ またやってくるぞう」奇妙に間のびしたその声の間に、べつの男の声が叫んだ。「おーい、ひっこんでろその女の子、だめ、走っちゃだめ！ 白い服はぜっこうの目標になるんだ、……おい！」

白い服——ヒロ子さんだ。きつと、ヒロ子さんは撃たれて死んじやうんだ。

そのとき第二撃がきた。男が絶叫した。彼は、動くことができなかった。頬つぺたを畑の土に押しつけ、目をつぶって、けんめいに呼吸をこらしていた。頭が痺れているみたいで、でも、無意識のうちに身体を覆おうとするみたいに、手で必死に芋の葉を引っ張りつづけていた。あたりが急に①として、旋回する小型機の爆音だけが不気味につづいていた。

突然、視野に大きく白いものが入ってきて、やわらかい重いものが彼をおさえつけた。

「さ、早く逃げるの。いっしょに、さ、早く。だいたいようぶ？」目を吊りあげ、別人のような真青なヒロ子さんが、熱い呼吸でいった。彼は、口がきけなかった。全身が硬直して、目にはヒロ子さん

の服の白さだけがあざやかに映っていた。

「いまのうちに、逃げるの、……なにしてるの？ さ、早く！」

ヒロ子さんは、怒ったようなこわい顔をしていた。ああ、ほくはヒロ子さんといっしょに殺されちゃう。ほくは死んじやうんだ、と彼は思った。声の出たのは、その途端だった。ふいに、彼は狂ったような声で叫んだ。

「よせ！ 向うへ行け！ 目立つちゃうじゃないかよ！」

「たすけにきたのよ！」ヒロ子さんもなった。「早く、道の防空壕に……」

「いやだったら！ ヒロ子さんとなんて、いっしょに行くのいやだよ！」夢中で、彼は全身の力でヒロ子さんを突きとばした。「……むこうへ行け！」

悲鳴を、彼は聞かなかった。そのとき強烈な衝撃と轟音が地べたをたたきつけて、芋の葉が空に舞いあがった。あたりに砂埃のような幕が立って、彼は彼の手で仰向けに突きとばされたヒロ子さんがまるでゴムマリのようにはずんで空中に浮くのを見た。

葬列は、芋畑のあいだを縫って進んでいた。それはあまりにも記憶の中のあの日の光景に似ていた。これは、ただの偶然なのだろうか。

真夏の太陽がじかに首すじに照りつけ、眩暈に似たものをおぼえながら、彼は、ふと、自分には夏以外の季節がなかったような気がしていた。……それも、助けにきてくれた少女を、わざわざ銃撃のしたに突きとばしたあの夏、殺人をおかした、戦時中の、あのだ一つの

とも、おれに直接の責任がないのはたしかなのだ。

「……この人、足が悪い人だった？」

彼は、群れながら列のあとにつづく子供たちの一人にたずねた。あのとき、彼女は太腿をやられたのだ、と思いかえしながら。

「ううん。足が悪い人なんかじゃない。からだはぜんぜん丈夫だったよ」

一人が、首をふって答えた。

では、癒ったのだ！ おれはまったくの無罪なのだ！

彼は、長い呼吸を吐いた。苦笑が頬にのぼってきた。おれの殺人は、幻影にすぎなかった。あれからの年月、重くおれをとりまきつけていた一つの夏の記憶、それはおれの妄想、おれの **D** でしかなかったのだ。

葬列は確実に一人の人間の死を意味していた。それをまえに、いささか彼は不謹慎だったかもしれない。しかし十数年間もの **D** から解き放たれ、彼は、青空のような一つの幸福に化してしまっていた。……もしかしたら、その有頂天さが、彼にそんなよけいな質問を口に出させたのかもしれない。

「なんの病気で死んだの？ この人」

うさぎきした、むしろ軽薄な口調で彼はたずねた。

「この小母さんねえ、ふつうじゃなかったんだよ」

ませた目をした男の子が答えた。

「昨日ねえ、川にとびこんで自殺しちゃったのさ」

「へえ。失恋でもしたの？」

夏の季節だけが、いまだに自分をとりまきつづけているような気がしていた。

彼女は重傷だった。下半身を真赤に染めたヒロ子さんはもはや意識がなく、男たちが即席の担架で彼女の家へはこんだ。そして、彼は彼女のその後を聞かずにこの町を去った。あの翌日、戦争は終わったのだ。

芋の葉を、白く裏返して風が渡って行く。葬列は彼のほうに向かってきた。中央に、写真の置かれている粗末な柩がある。写真の顔は女だ。それもまだ若い女のように見える。……不意に、ある予感が彼をとらえた。彼は歩きはじめた。

彼は、片足を畦道の土にのせて立ちどまった。あまり人数の多くはない葬式の人の列が、ゆつくりとその彼のまえを過ぎる。彼はすこし頭を下げ、しかし目は熱心に柩の上の写真をみつめていた。もし、あのとき死んでいなかったら、彼女はたしか二十八か、九だ。

突然、彼は奇妙な喜びで胸がしぼられるような気がした。その写真には、**C** 昔の彼女の面かけが残っている。それは、三十歳近くなったヒロ子さんの写真だった。

まちがいではなかった。彼は、自分が叫びださなかったのが、むしろ不思議なくらいだった。

——おれは、人殺しではなかったのだ。

彼は、胸に湧きあがるものを、けんめいに冷静におさえつけながら思った。たとえなんで死んだにせよ、とにかくこの十数年間を生きつづけたのなら、もはや彼女の死はおれの責任とはいえない。すくなく

「バカだなあ小父さん」運動靴の子供たちは、口々にさもおかしそうに笑った。

「だってさ、この小母さん、もうお婆さんだったんだよ」

「お婆さん？ どうして。あの写真だったら、せいぜい三十くらいじゃないか」

「ああ、あの写真か。……あれねえ、うんと昔のしかなかったんだよ」

涙をたらした子があとをいった。

「だってさ、あの小母さん、なにしろ戦争でね、一人きりの女の子がこの畑で機銃で撃たれて死んじやってね、それからずっとふつうじゃなくなっちゃって」

葬列は、松の木の立つ丘へのぼりはじめていた。遠くなったその葬列との距離を縮めようというのか、子供たちは芋畑の中におどりこむと、歓声をあげながら駆けはじめた。

立ちどまったまま、彼は写真をのせた柩がかかるく左右に揺れ、彼女の母の葬列が丘を上って行くのを見ていた。一つの夏といっしょに、その柩の抱きしめている沈黙。彼は、いまはその二つになった沈黙、二つの死が、もはや自分のなかで永遠につづくだろうこと、永遠につづくほかはないことがわかっていた。彼は、葬列のあとを追わなかった。追う必要がなかった。この二つの死は、結局、おれのなかに埋葬されるほかはないのだ。

——でも、なんとという皮肉だろう、と彼は口の中でいった。あれか

ら、おれはこの傷にさわりたくない一心で海岸のこの町を避けつづけてきたというのに。そうして今日、せつかく十数年後のこの町、現在のあの芋畑をながめて、はつきりと敗戦の夏のあの記憶を自分の現在から追放し、過去の中に封印してしまつて、自分の身をかるくするたにだけおれはこの町に下りてみたというのに。……まったく、なんという **E** だろう。

やがて、彼はゆつくりと駅の方角に足を向けた。風がさわぎ、芋の葉の匂いがある。よく晴れた空が青く、太陽はあいかわらず眩しかった。海の音も耳にもどってくる。汽車が、単調な車輪の響きを立て、線路を走つて行く。彼は、ふと、いまとはちがう時間、たぶん未来のなかの別な夏に、自分はまた今とおなじ風景をながめ、今とおなじ音を聞くのだろうという気がした。そして時をへだて、おれはきつと自分の夏のいくつかの瞬間を、一つの痛みとしてよみがえらすのだろう……。

思いながら、彼はアーケードの下の道を歩いていた。もはや逃げ場所はないのだという意識が、彼の足どりをひどく確実なものにしていた。

(山川 方夫『夏の葬列』による)

\*疎開児童Ⅱ空襲などに備えて児童が地方に分散すること。

\*国民学校Ⅱ一九四一年から一九四七年までの小学校の名称。

\*畦道Ⅱ田と田の間に土を盛って作った道。

\*カンサイキⅡ軍艦に積みこみ、そこから発着する航空機。

\*防空壕Ⅱ空襲から避難するための穴や堀。

問一 —— 線部1「□をく答えた」とありますが、この時の彼の気持ち

として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おもしろくない気持ち
- イ 怒つたような気持ち
- ウ 納得のいかない気持ち
- エ 不思議に思う気持ち

問二  A・C に入ることばの組み合わせとして最も適切なものを次

の中から選び、記号で答えなさい。

- ア A そわそわと C しげしげと
- イ A どうどうと C ちらちらと
- ウ A こそこそと C まざまざと
- エ A のろのろと C ありありと

問三  B に入るヒロ子さんの様子を説明したものととして最も適切な

ものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 軽べつした顔をして首をふった
- イ まじめな顔をして首をかしげた
- ウ 心配そうな顔をして首をひねった
- エ 面倒くさい顔をして首をすくめた

問四 —— 線部①②③のうち一つだけ他の品詞と異なるものを選び、記

号で答えなさい。

問五 —— 線部2「大きな石がく気がした」について、次の問いに答

えなさい。

- 1 「大きな石」とありますが、このことばでたとえたものを文章の中から漢字三字で抜き出して答えなさい。
- 2 この表現効果を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
  - ア 突然、何か異常なものが現れた驚きと人を絶望させるような運命的な大きな力を感じさせる効果がある。
  - イ 突然、何か得体の知れないものが現れた不気味さと人を容赦なく押しつぶすような大きな力を感じさせる効果がある。
  - ウ 突然、何か奇妙なものが現れた恐ろしさと人を寄せつけようとしなない神秘的な大きな力を感じさせる効果がある。
  - エ 突然、何か不思議なものが現れた不安さと人を投げ飛ばすような自然の大きな力を感じさせる効果がある。

問六 — 線部3「全身が硬直して」とありますが、この時の彼の気持ちを表すことばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。  
ア 恐怖 イ 失望 ウ 後悔 エ 苦悩

問七 — 線部4「彼は、突き飛ばした」とありますが、その理由を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ヒロ子さんの押しつけがましい善意が、この時ばかりは我慢できなかつたから。

イ 自分と一緒にいるとヒロ子さんが殺されてしまうので、せめて彼女だけは助けたかったから。

ウ ヒロ子さんと一緒にいると銃撃の目標とされ、自分も死んでしまふと思つたから。

エ 自分を助けるためにヒロ子さんが犠牲になつたと、後々まで言われるのがいやだったから。

問八 — 線部5「奇妙なく気がした」とありますが、この時の思いが具体的に述べられている部分を文章中から三十五字以上四十字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十一 □ E に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 偶然の皮肉 イ 永遠の沈黙  
ウ 幸福の幻影 エ 人生の失敗

問十二 — 線部7「一つの痛み」とありますが、これをもたらす原因が述べられていることばを文章中から四字で抜き出して答えなさい。

問十三 この作品の特色を説明したものととして適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この作品の五つの場面は語られる内容が時間の順序に沿つたものではなく、構成や展開を工夫するために順序が入れかえられている。

イ 主人公の呼び名は状況や場面に応じて「彼」「ぼく」「おれ」「自分」とたくみに書き分けられていて、読者にさまざまな思いを感じさせてくれる。

ウ 五つの場面の随所に印象を強めるための工夫された表現が数多く用いられ、時間帯や風景描写がそれぞれの場面に緊迫感を与えている。

エ 情報を小出しにしていく手法をとることで、読者にヒロ子さんについて考えさせる構成をとり、思わぬ展開で結末を深く印象づけている。

問九 □ D に入ることばを、次にあげた意味と用例を参考にして漢字二字で答えなさい。

〈意味〉非常に恐ろしいできごとやきわめて不愉快なできごとのたとえ

〈用例〉 — にうなされる

— からさめる

— のような出来事

問十 — 線部6「いささか、かもしれない」とありますが、「不謹慎」

の内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 葬列を見て、自分には関係のないものとして他人ごとのように平然としていること。

イ 一人の人間の死を前にして、自分だけが助かつて良かったとひそかに喜んでいること。

ウ 葬列を見て、人間の死というものを重く受け止めず軽く考えていること。

エ 一人の人間の死を前にして、自分の無罪を確信し幸福な気分になつてひたっていること。

問十四 作者がこの作品で描き出そうとしているものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一人の人間として、その家族や友人の命までも容赦なく奪いつてしまう戦争そのものに対する嫌悪感を鋭く描いている。

イ 自分の人生がとり返しのつかない状態におちいつてしまった体験から、戦争とは何かについて苦悩する様子を鋭く描いている。

ウ 人間の尊さが失われ、醜さだけがむき出しになっている状況下で生きていかねばならない心の迷いを鋭く描いている。

エ 戦争という状況下の残酷さと、その悲しみを背負って生きていかねばならない一人の人間の姿を鋭く描いている。

#### 四

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点等は一字として数えないこと。)

#### 〔I〕

四月二十二日。金曜日。朝十時すぎに吉祥寺で井の頭線の急行に乗った。表現における普通とは何か。そんなことをうつらうつら考えていると、車内放送が聞こえてきた。

——あいにくの雨のため、脚を組んだり投げだしたりなさいませんよう、よろしく御協力願います。

いつもならなにげなく聞きながすところだが、ことはと国民性といった問題がいくらか頭にひっかかっていたのだろう。なんとなく日本人らしいもの言いに感じられた。ごくありふれたアナウンスなのだろうが、このままの直訳が海のかなたでもありふれたものとして通るとはかぎらない。

#### 〔II〕

薄目をあけて考える。そこに日本語らしさを感じるのはなぜか。その言語表現のどこに特殊性があるのだろうか。このような場面でのこの注意をする車掌の発話行為そのものがすでに普遍的だとは思えない。

——電車が入ってまいります。危険ですから白線の内側に下がってお待ちください。

大の大人に対して、こういうきわめて常識的なことにまで注意をくつかえす極度のいたわりは、やはりひとつの国民性なのだろう。バス

か、という日本語行動そのものの性格のことだ。この一例から汲みとれるのは次の三点だろう。

#### 〔III〕

第一は、非限定性である。聞き手との関係を大切にする日本人の言語行動では、ものをはっきり言いすぎることを警戒する。あまりに明確な表現は、解釈の幅がないため、相手の判断をおおぐという姿勢に欠ける。A、送り返りの考えるただ一つの意味を受け手が否応なく認めねばならないような確かな表現は、受け手の自主的な判断の余地を残さないで、相手に強く響くわけだ。そこで、あたりをやりわらかくするために、なんらかのほかしをもうけようとする。りんごをちようど五個ほしい客が、「五つばかり」とか「五つほど」とか言っている。Aアナウンスのなかに「脚を組んだり投げ出したり」と「たり」で運ぶところがある。そこにも同質の効果がうかがわれる。なんとということもない言いまわしだが、これを「脚を組むことと投げだすこと」という言い方と比べてみれば、そこに多少ともBがあることに容易に気づく。たとえば、「飛んだり跳ねたり」という表現は、そこに取りあげていない「走ったり騒いだり暴れたり」というようなことを\*を言外に含んでいる。A、「たり」とともに言語化されるものは、その表現における焦点部分にすぎず、それ以外の対象の広がりを二ユアンスとして含む傾向がある。(中略)

並立の機能を捨てて、このように「たり」が単独で使われたりするのは、そういう非限定の感じがソフト・フォーカスの表現効果をあげ

の停留所に名前がなく、運転手にたずねても、当然の顔つきで「知らない」と言っている国がある。それに比べれば、プラットホームに白線が引いてあるだけでも相当に親切なはずだ。そのうえに駅員がこのような至れり尽くせりのアナウンスを日に百回となく反復する例は、世界でどのくらい広く見られるだろうか。集団の論理を優先し、その成員の個としての独立を抑えてきた民族の歴史がある。それは農耕民の定住生活から自然に起こった思考様式だとも言われる。その限りでは、この国だけのものの考え方はなさそうだが、いずれにしろ、そこに育まれたいわば他律の行動原理がサービス業のこのようなサービス過剰の言動をうながしていることは十分に考えられるし、また、少なくともその並はずれた程度において、そのことがなにかの特殊性をそなえているのも間違いない。

雨の日のあの車内アナウンスも、一人前の成人に向かってごくあたりまえのことを注意している。その点ですでに普遍的な言語行動とは思えない。この例では、さらに、その発話を形づくっていることばの在り方に、いかにも日本人らしい性格がのぞく。そこに映っている限りでの日本語表現の特色のいくつかを取りだし、その背景を考えてみたい。

語の選択でまず目につくのは「あいにく」だろう。「あいにく出かけております」とか「みんな使ってしまいました。おあいにくさま」とか多様な用法があつて、外国語に翻訳しにくいことばの一つらしい。しかし、日本人の表現的特徴として指摘したいのは、そういう単発の日本語らしさよりも、何をどう取りあげ、それをどこまで言語化する

ることを期待しているのだろう。

#### 〔IV〕

第二は、間接性である。これも一種のほかしだと考えていい。手紙をもとに日米の文章構成の差をさぐった実験の結果が報告された。二か月前に親しい友人を自宅に招いた際に貸した本を返してくれるように相手に頼むというCで、日本人とアメリカ人各二十名に手紙を書かせたところ、いくつかの違いが見られたという。特に目立つのは、日本語の手紙のほうがプロローグとエピローグが長いという傾向がはつきりとあらわれたことだ。これは客が訪問先を辞する際の行動と対応する。アメリカの場合は入口のドアの開閉ひとつで別れは一瞬のうちで成立する。ところが、日本の場合は、座敷でお辞儀を交し、玄関で再びお辞儀を交し、門で三たびお辞儀を交す。さらには、バス停まで送るか、少なくとも門のところ立って、相手の姿が見えなくなるまで見送るのが礼儀とされる。A、別れは徐々に起こる。手紙でいきなり用件を切りださないのも、できるだけ唐突さを避け、自然に運びたいのだ。プロローグやエピローグはその緩衝地帯なのである。

また、日本人の対話はまともに応じ合わないと言われる。いくらするかと値段を聞けば、せいぜい勉強してもらおうと応じる。もう少し勉強できないかと問うと、いい品物でお買い得だという答えが返ってくる。

長いプロローグでおだやかに入るのも、このように相手の予先をた

例の車内放送にはあからさまな間接表現は見あたらないが、「なさないでください」というストレートな禁止の要求表現形式を選ばずに、「願います」という送り手自身の行動に置き換えて示したのは、やはり一種の間接性の志向であったかもしれない。また、「なさいませんよう」を「御注意」と承けずに「御協力」と承けたところにも、<sup>7</sup>薄衣一枚の間接性が感じられる。

〔V〕 第三は「省略性」である。掛軸の絵を見ると明らかなように、東洋美術には空白部分が目だつ。下方三割ほどを使って岩と谷川と遠い松が描いてある。今、仮に、経済観念の妙に発達した者が、画面がもつたないからといって上方七割を切り取ったとしよう。その時、絵は価値の大半を失ってしまうだろう。切り取った部分にはなにも描かれていない。しかし、その空白部の存在が作品の芸術性を支えていたことがはつきりする。

文章でもあまりに隅々まで描き込むことを日本人は嫌ってきた。省略可能な範囲が狭く冗長になりやすい英語やフランス語の表現が野暮に見えるほど、<sup>8</sup>日本語の文章は贅肉を落してすっきりとした容姿を見せる。

雨の日の車内放送でも、「雨のため」と「脚を組んだり投げだしたり」とのつながりには隙間がある。雨降りの日は靴が汚れているので、脚を組んだり投げだしたりすると、他の乗客の衣服がその靴にふれて汚れてしまう。その汚れる確率と程度は晴れた日の比ではない。論理的にはそういった情報が両者をつないでいるはずなのだが、そこまで

\*緩衝地帯Ⅱ対立する二つのもの間にあつて両者の不和をやわらげる場所。

\*勉強するⅡ商品などを安く売る。

\*冗長Ⅱ文章や話などがくどくどと長いこと。

<sup>9</sup>べつたりと言語化した表現はどうみても日本人好みではない。「脚を組んだり投げだしたり」の主体と「願います」の主体をことばに出すことなどは、<sup>10</sup>ますます思いも寄らぬことだったにちがいない。

〔VI〕 ひとつの小さなアナウンスに影を落した日本人の美意識を非限定性・間接性・省略性と数えてみた。日本語の表現特徴のようなものはまだまだありそうだ。

表現形式の完結感を回避する傾向もその一つだ。「どうぞお茶をお飲みください」という完結文が日本語を母国語とする者の口から出ることはめつたにない。単に「どうぞ」と言うか、せいぜい「お茶をどうぞ」ぐらいで止めるのが普通だろう。あるいは、「粗茶でございませが」と言うかもしれない。これらは省略の問題とも見られぬことはないが、「粗茶でございませ」のあとに添える「が」の存在は、言い切つて相手にきつく響くのを避けるために、ことさら言い切らない形を選んだことを思わせる。

(中村 明『その特殊性の行方を考える』による)

\*発話Ⅱ心に思ったことをことばにして口に出すこと。

\*言外Ⅱ直接言葉に表されていないところ。

\*ニュアンスⅡ感情や意味などのほんの少しの違い。

\*ソフト・フォーカスⅡ写真で、レンズの焦点をややあまくしてやわらかな感じに写し出すこと。

\*プロローグとエピローグⅡ物事の始まりと物事の終わり。序章と終章。

問一——線部1「うつらうつら」2「至れり尽くせり」4「否応なく」

の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

1 うつらうつら

ア 眠気が消えてすぐに我にもどるようす

イ 目が覚めているかいないかはつきりしないようす

ウ 神経がたかぶつてまったく眠れないようす

エ 急に訳もなく眠気が襲ってくるようす

2 至れり尽くせり

ア 相手を思いやつてさまざまな手助けをすること

イ あれこれといろいろ考え過ぎて度をこすこと

ウ 気がついたことを何度もいねいにくり返すこと

エ 心づかいやもてなしがよく行き届いていること

4 否応なく

ア 何の不平や不満もなく

イ もうこれ以上考える余裕もなく

ウ 承知・不承知にかかわらず

エ 条件の有無によらず

問二 □ A に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア しかし イ だから ウ つまり エ また

問三 □ C に入ることばとして次の漢字を組み合わせて「ある状況や条件を仮に決めること。また決めた考え」という意味になる二字の熟語を答えなさい。

報・表・定・向・現・想・傾・告

問四 — 線部3「そこ」の内容を具体的に表していることばを文章中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問五 — 線部5「同質の効果」の説明として次の□にあてはまることばを文章中から十五字以上二十字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

受け手が自主的に判断できるように□のと同じ効果

問六 □ B に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手の判断      イ 限定のゆるさ  
ウ 並立のあまさ      エ 的確な表現

問九 — 線部8「日本語のくを見せる」とありますが、これをわかりやすく説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本語の文章は省略できる幅が広く、言葉を削ることで隙間ができるもののかえって簡潔な文章となる。  
イ 日本語の文章は省略できる幅が狭いので、適切な言葉を削ることで隙間ができ明瞭な文章となる。  
ウ 日本語の文章は省略できる幅が広く、言葉を削れば削るほど隙間ができて明確で行き届いた文章となる。  
エ 日本語の文章は省略できる幅が狭いので、特定の言葉を削ることによって隙間のない整った文章となる。

問十 — 線部9「べったりと言語化した表現」とありますが、このことをわかりやすく説明している部分を文章中より十四字で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問七 — 線部6「矛先をたくみに外す」とありますが、これを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 誤解を招かないようにまちがいがなく確実に答えること。  
イ 相手を気にせずこちらの思わくに沿って答えること。  
ウ 質問の答えにはなっていないけれどもまじめに答えること。  
エ 正面から受け答えしないうずらしながら答えること。

問八 — 線部7「薄衣一枚の間接性」とありますが、これをわかりやすく説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手に要求する際に形式にとられない表現をとることで受けとった人が逆にしばらくしてしまい、ことばの意味あい少し固いものになってしまうこと。  
イ 相手に要求する際に禁止表現をとらないことで受けとった人が自身で行うようになり、ことばの意味あい少しやわらかなものになってしまうこと。  
ウ 相手に要求する際に難しい表現をとらないことで受けとった人が納得しやすくなり、ことばの意味あい少し易しいものになってしまうこと。  
エ 相手に要求する際に禁止表現をとることで受けとった人が義務的に行うようになり、ことばの意味あい少し強いものになってしまうこと。

問十一 — 線部10「ますますちがいない」とありますが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は文章中にほかしを設け、的確な表現より情緒豊かなことばを嫌ったから。  
イ 日本人は集団の論理を優先する国民性を持ち、個人主体の言い方を嫌ったから。  
ウ 日本人は受け手の理解に幅を持たせ、伝えたいことを厳密に表現することを嫌ったから。  
エ 日本人は論理的な思考を好み、簡単で要領よくまとまっている表現を嫌ったから。

問十二 次のA~Dの小見出しを本文の展開に沿って順番に組み合わせ、記号で答えなさい。

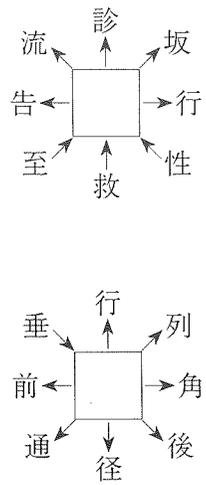
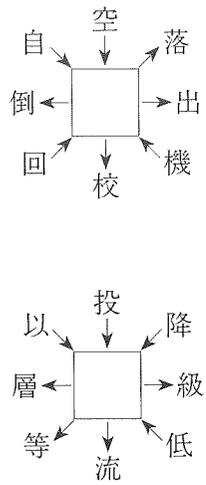
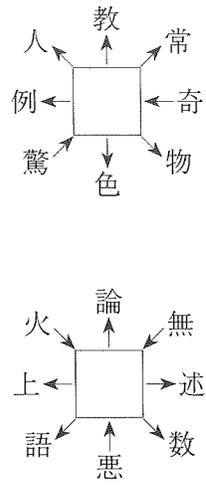
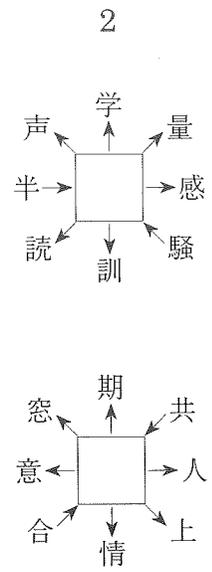
たものとして最も適切なものを後から選び、記号で答えなさい。

- A 幅をもたせる表現
- B ハッキリよりスッキリの表現
- C つかず離れずの表現
- D めんどくさいのいい言語行動

- (I) 前書き ↓ B ↓ C ↓ A ↓ D ↓ 完結感を避ける
- (II) 前書き ↓ D ↓ A ↓ C ↓ B ↓ 完結感を避ける
- (III) 前書き ↓ C ↓ D ↓ B ↓ A ↓ 完結感を避ける
- (IV) 前書き ↓ A ↓ B ↓ D ↓ C ↓ 完結感を避ける
- (V) 前書き ↓ A ↓ B ↓ D ↓ C ↓ 完結感を避ける
- (VI) 前書き ↓ A ↓ B ↓ D ↓ C ↓ 完結感を避ける

問十三 この作品の題として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- A 日本的な感情表現
- I 日本語の論理性
- ウ 日本的な表現の構造
- エ 日本語の芸術性

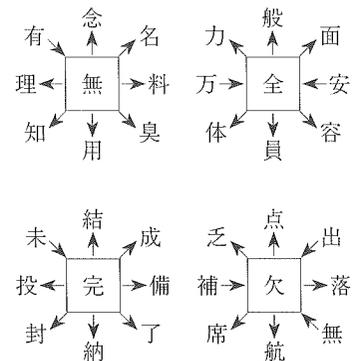


### 五

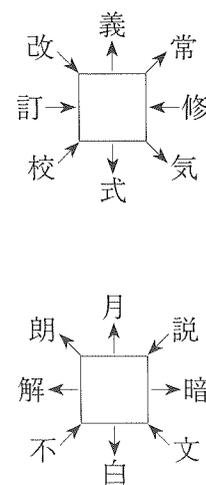
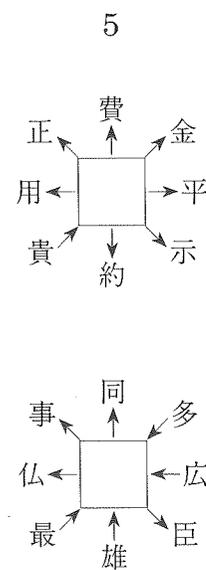
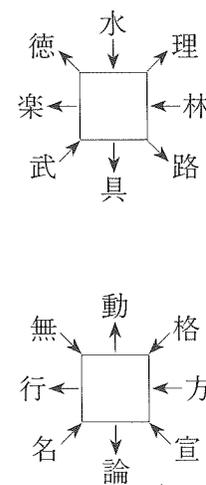
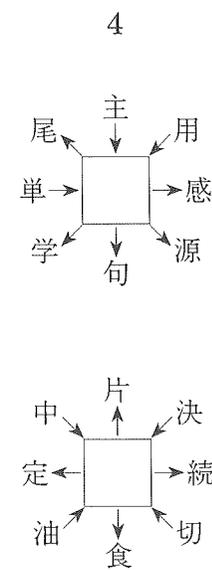
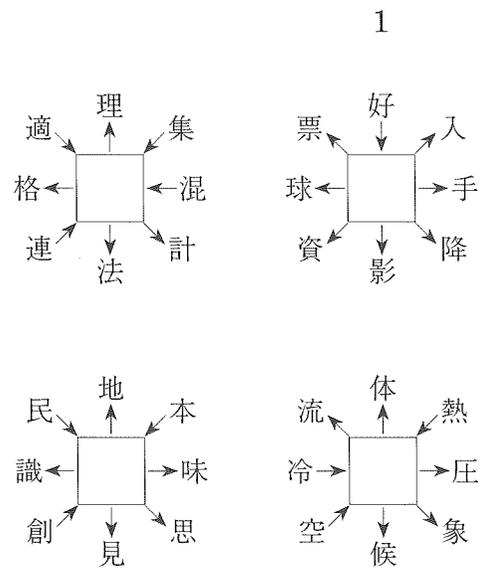
次の  のまわりの八つの漢字と二字の熟語ができる

よう中央に漢字を入れ、その漢字を組み合わせ、四字の熟語を作りなさい。

例



解答 完全無欠



# 国語解答用紙

受験番号

番

氏名

解

答

得点

五		四				三				二	一	
4	1	問七	問七	問四	問一	問三	問八	問五	問一	1	1	
					1			1				
										2	2	
			問八		2				問二			
							問九	2				
5	2	問七			4	問三				3	3	
									問三			
			問九				問十	問六				
				問五	問二					4	4	
	3	問七										
			問十			問四				(める)	(す)	
				問六	問三		問七			5	5	
										(れる)	(らす)	
合計												

合計	
----	--